



Title	大学教育における「やさしい日本語」に関する授業の導入について：「やさしい日本語」に関する大学生の意識調査に着目して
Author(s)	張, 畐
Citation	大阪大学言語文化学. 2025, 34, p. 33-47
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102079
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大学教育における「やさしい日本語」に関する授業の導入について —「やさしい日本語」に関する大学生の意識調査に着目して—*

張 畔**

キーワード：やさしい日本語、大学教育、意識調査

论文的前半部分，是以大学生为对象，进行了关于“やさしい日本語”的意识现状问卷调查。调查结果显示，尽管此次的调查对象对于“やさしい日本語”的认知度较低，但一定数量的调查对象表现出较高的学习意愿和兴趣并有相当部分的调查对象支持将“やさしい日本語”相关课程导入到大学教育课程当中。论文的后半部分在前半部分调查结果的分析考察的基础之上，对于将“やさしい日本語”相关课程导入大学教育的必要性、课程导入的意义、课程导入时的注意事项以及日本大学的机构改革与“やさしい日本語”课程的关系进行了尝试性论述。

1はじめに

秋元美晴・池上摩希子ら（2014）によると、「やさしい日本語」という表現は佐藤和之氏が1990年代に外国人被災者の命を救うために「迅速に」「正確に」「簡潔に」災害情報を伝えるために、誰も理解できる日本語という意味で使い始めてから広く使われるようになった。この「やさしい日本語」は、災害発生時において外国人に迅速かつ正確な情報を提供することを主な目的として着目されてきた。このような減災を目的とした利用は、1995年以降、2007年の新潟中越地震や2011年の東日本大震災などを経て、日本全国に広がりつつある。

近年では、日本における在留外国人の増加および国籍の多様化を背景に、平時の日常生活においても「やさしい日本語」の活用が進んでいることが観察される。これに関して、日本政府も「やさしい日本語」の有用性を認識し、その普及を図っている。たとえば、2020年7月に発表された「外国人材の受け入れ・共生のための総合的対応策（令和2年度改訂）」で、施策番号52において、全省庁的に「外国人向けの行政情報・生活情報の更なる内容の充実と、多言語・やさしい日本語化による情報提供・発信を進める」（2020:14）と記載されている。

* 关于在大学教育中导入“やさしい日本語”课程的探讨—基于以大学生为对象的“やさしい日本語”的意识调查—（ZHANG Bin）

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

さらに、2020年8月には、出入国管理庁および文化庁が共に『在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン』を公表し、書き言葉に焦点を当てた指針を示した。このガイドライン（2020）の冒頭では、「『やさしい日本語』とは難解な言葉を置き換えるなど、相手に配慮したわかりやすい日本語であるとされ、美しさや豊かさを軽視せず、多様な人々に対して日本語を介して明確に情報を伝えることを目指している」（2020:3）と述べられている。

2 研究目的及び本研究の意義

近年、外国人住民の増加を背景に、多文化共生社会の構築を目指し、日本国政府は「やさしい日本語」の普及に関する様々な政策を策定している。また、地方自治体や民間団体においても、「やさしい日本語」の普及を推進する取り組みが行われている。しかしながら、水野（2022）は、「『やさしい日本語』は行政機関や事業者などには広まりつつあるが、一般市民には十分に知られていない」（2022:10）と指摘している。現状として、日本社会における「やさしい日本語」の認知度は依然として低い状況である。さらに、日常的に外国人と接触する機会が少ない日本人にとって、「やさしい日本語」の活用は必ずしも容易ではないと言える。

より円滑な多文化共生社会を実現するためには、「やさしい日本語」の認知度を高めるとともに、効果的な普及方法の検討が求められる。現時点での「やさしい日本語」に関する先行研究では、学校教育に「やさしい日本語」を導入する試みがいくつか見られるが、小・中・高・大学のどの教育段階に導入すべきかについては、明確な結論が示されておらず、探求は今なお続いている。筆者は、近年多くの大学で「異文化理解」、「異文化コミュニケーション」、「多文化共生」といった多文化共生社会に適応するための科目が一般教養科目として既に開講されていることから、「やさしい日本語」はこれらの科目と密接に関連しており、授業への導入が比較的に容易であると考えたため、今回大学教育を対象としてみた。

したがって、本研究の目的は、まず「やさしい日本語」に関する大学生の意識の現状を明らかにする、その上で大学教育における授業導入の意義を検討し、導入する場合の注意点を論じることによって、大学教育に「やさしい日本語」に関する授業を導入する必要性を明らかにして、「やさしい日本語」の普及手段の一つとして、大学教育における「やさしい日本語」に関する授業の導入を提言することにある。

3 先行研究

3.1 二つの「やさしい日本語」

3.1.1 佐藤和之による「やさしい日本語」：災害時の情報伝達ツール

宮原・栗原（2011）は、『「やさしい日本語」と言った場合に、真っ先に思い浮かぶのは、佐藤和之が提唱する、災害時の情報伝達ツールとしての「やさしい日本語」であろう』（2011:44）と述べている。1995年の阪神・淡路大震災をきっかけとして、防災・減災のために考案された「やさしい日本語」は、市役所の防災通知や防災用パンフレットなど身近によく見られる。

佐藤の所属する弘前大学人文学部社会言語では、災害発生からの72時間に命を守る情報を確実に伝える「やさしい日本語」をカテゴリーIとし、日頃からの生活情報を伝える「やさしい日本語」をカテゴリーIIとして、使用語彙や文規則を使い分けることとした。カテゴリーIIにはカテゴリーIの表現規則を全て含むようにし、カテゴリーIIを使った「やさしい日本語」での情報伝達に慣れることで、いざ災害が起きた時にカテゴリーIでの災害情報を作れるように配慮した。

3.1.2 庵功雄による〈やさしい日本語〉：平時における多様な役割

佐藤（2013）の「やさしい日本語」カテゴリーIが考案された後、庵功雄（2019）は平時の外国人への情報のあり方という視点から、〈やさしい日本語〉に関する研究をはじめ、用語法の「やさしい日本語」を〈やさしい日本語〉と表記している（庵,2019:p.2）。庵（2016:39-43）は〈やさしい日本語〉には以下のようないかだの側面があると指摘している。

- ① 初期日本語教育の公的保障の対象としての〈やさしい日本語〉
- ② 地域社会の共通言語としての〈やさしい日本語〉
- ③ 地域型初級としての〈やさしい日本語〉

そして、庵（2016）は、居場所作りのための〈やさしい日本語〉・バイパスとしての〈やさしい日本語〉・日本語母語話者にとっての〈やさしい日本語〉という3つの視点からも〈やさしい日本語〉が持つ3つの側面を論じている。さらに、庵は〈やさしい日本語〉を用いた公文書の書き換えプロジェクト、自動翻訳による書き換え技術の開発などにも動き出している。

3.2 教育における「やさしい日本語」が用いられる事例

秋元ほか（2014）によると、「やさしい日本語」は最初に考案されて以来、日本語教育の現場を中心に、様々な解釈のもとで実践・研究が展開してきた。例えば、将来の

外国人診療に役立てようと、順天堂大学医学部において4年生の学生を対象にした「やさしい日本語」の授業が実施された¹。また武田ほか（2020: 661）は、医療における「やさしい日本語」に関する指摘を、以下のようにまとめている。

「やさしい日本語」は、外国人診療に対する医療者の態度や行動を変える可能性がある。

《中略》

医療機関の受診は、言葉が分かっても緊張するものである。「やさしい日本語」で対応されれば、外国人患者に限らず患者・家族の不安軽減や意思疎通の円滑化につながり、受診しやすさは各段に増すであろう。また、病気や治療に対する理解が進めば、安心するだけでなく誤りが生じたときにも気づきやすく安全な医療にもつながる。

日常の臨床業務で活用できるスキルとして、「やさしい日本語」が医学・医療系教育において必修となることを期待する。

武田ほか（2020）が指摘している通り、「やさしい日本語」は医療分野における重要な役割を果たすことが期待されており、今後の医学・医療系教育においても、その重視度の度合いは高まる可能性があると考えられる。将来の多文化共生社会環境に適応するためには、医療系学部の学生に限らず、一般の大学生に対しても大学教育の段階で「やさしい日本語」に関する授業を提供することが有益であると言える。

4 「やさしい日本語」に関する大学生の意識調査

4.1 調査の概要

調査目的：本研究では、大学生の「やさしい日本語」に対する意識を調査し、得られたデータを分析することを通して、「やさしい日本語」に対する大学生の意識現状を明らかにする。そして、分析結果に基づき、「やさしい日本語」を普及させるための新たな手段として、大学教育における「やさしい日本語」に関する授業の導入可能性について検討してみる。この過程において、調査対象者の意識を解明することに重点を置く。

調査内容：調査アンケートの冒頭において、「やさしい日本語」の起源および定義を説明し、その活用実例を提示した。アンケートの質問項目は、表1に示すように構成されている。

¹ 体感して学ぶ！外国人診療に役立つ「やさしい日本語」の授業を医学部で <https://goodhealth.juntendo.ac.jp/pickup/000121.html> (2022年11月12日閲覧)

表1 アンケートの質問項目²

4	以前から「やさしい日本語」という概念を知っていました？
5	「やさしい日本語」という概念はどんなツールで知っていましたか？
6	あなたは「やさしい日本語」について、どれくらい知っていますか？
7	あなたは「やさしい日本語」を用いて、外国人と話したことがありますか？
8	あなたは「やさしい日本語」について、興味がありますか？
9	あなたは、これから「やさしい日本語」について、学びたいですか？
10	「やさしい日本語」を学ぶことは、あなたの将来に役に立つことがあると思いますか？
11	大学において「やさしい日本語」に関する授業を導入する必要があると思いますか？
12	大学教育において「やさしい日本語」に関する授業を導入する必要があると思う理由はなんですか？
13	大学教育において「やさしい日本語」に関する授業を導入する必要がないと思う理由はなんですか？
14	どうすれば、普通の日本語から「やさしい日本語」になると思いますか？それぞの項目に関して、該当するものを一つ選んでください。
15	外国人に向けて「やさしい日本語」資料を作成する際に、あなたが参考したい資料を選択してください。
16	「やさしい日本語」について、ご意見やコメントなどがあれば、ぜひご記入お願ひいたします。(任意)

調査対象：大阪教育大学教育協働学科の在学生

調査期間：2022年10月7日～10月31日

調査方法：アンケート調査

アンケートの作成方法：Google フォームを用いて電子版の調査アンケートを作成した。

調査手順：筆者の指導教員が担当する二つの授業の受講生に対し、直接教室を訪問して挨拶を行い、続いて調査目的について説明した後、アンケート調査への協力を依頼した。

回答方法：事前に、調査アンケートに回答するための URL を指導教員に送付し、その URL を授業用 Moodle を通じて学生に周知するよう依頼した。受講生は、Moodle 上に提供された回答用 URL にアクセスし、回答を入力する方式とした。

本調査は大阪教育大学教育協働学科の在学生を対象としているため、その調査結果は

²質問1から3に関しては、回答者の国籍、母語、および学年に関する情報を確認するための項目なので、表1には提示しないことにする。

同学科の在学生の現状を反映したものと言える。以下、調査結果の分析の中で言及されている「大学生」は、同学科の学生のことである。

4.2 調査結果

今回の調査アンケートにおいて、80名の学生に回答を依頼したところ、そのうち60名の学生から回答を得た。回収率は75%である。回答者の内訳は、日本人学生が56名、留学生が4名であった。本稿では、主に56名の日本人学生の回答に基づいて分析を行う³。本調査においては、留学生が対象者数4名と限られているため、分析における参考資料としての有効性が低いと判断し、今回の分析対象から除外することとする。

対象となる56名の日本人学生のうち、17名（30.4%）が以前から「やさしい日本語」を知っていることが判明した。一方で、「やさしい日本語」を知らない学生は39名（69.6%）になっており、全体の約7割を占めている。

まず、以前より「やさしい日本語」を知っている17名の学生に対し、「やさしい日本語」を知ったツールおよびその理解度を尋ねたところ、最も多くの学生が「学校の授業」を通じて知ることとなり、15名に及んだ。しかし、この17名のうち、11名は「『やさしい日本語』の名称の意味は理解しているが、具体的な作成方法はわからない」という段階に留まっており、「名称の意味と具体的な作成方法の両方とも知っている」学生はわずか2名であった。

次に、分析対象とした56名の学生に対して、「やさしい日本語」に対する「興味の有無」および「学習意欲」について尋ねた結果、「やさしい日本語」に興味を持ち、かつ学びたいと考えている学生は、いずれも8割以上を占めていることが判明した。

さらに、大学教育において「やさしい日本語」に関する授業を導入する必要性について学生の意識を調査したところ、19名の学生が導入の必要がないと回答したものの、37名（60%以上）の学生は授業の導入が必要であると回答した。

そこで、授業導入の必要性に関する意識をさらに深く検討するため、「導入が必要である」と考える理由や「導入が必要ない」と考える理由を具体的に尋ねた。まず、「導入が必要である」と考える理由としては、「周囲の外国人の増加」や「将来的に職場で『やさしい日本語』を使用する可能性がある」のような回答が最も多かった。また、「日常生活で外国人とコミュニケーションをとる機会が多い」「単純に面白そうである」といった理由も多く挙げられた。その他には、「他の外国語よりも『やさしい日本語』の方が学びやすい」「グローバル化が進展する中で、日本語の障壁を低くする方法を知ること

³ 本調査においては、留学生が対象者数4名と限られているため、分析における参考資料としての有効性が低いと判断し、今回の分析対象から除外することとする。

が重要である」という意見も見られたが、その数はわずかに1件に過ぎなかった。一方、「導入する必要がない」と考える理由としては、「あまり使用機会がない」が最も多く挙げられた(8件)。また、「日本語の母語話者にとって『やさしい日本語』を学ぶ必要はない」「『やさしい日本語』の作成方法が難しい」「もし導入するならば、高校までに済ませるべきである」といった理由も見受けられた。

さらに、「どのようにすれば、普通の日本語を『やさしい日本語』にすることができますのか」に関する大学生の考えを把握するため、「やさしい日本語」を作成する際の要点としてAからNまでの14項目を提示した(表2)。

表2 「やさしい日本語」を作成する際の要点

A	速さ	H	主語の使用について
B	声の大きさ	I	敬語の使用
C	声の明瞭さ	J	漢字を書く時に、ルビをつけるかどうか
D	方言使用の有無	K	文書を書く時に、漢字を使うかどうか
E	文末表現	L	外来語を使うかどうか
F	文の長さ	M	擬態語を使うかどうか
G	助詞の使用	N	二重表現を使うかどうか

その中から該当するものについて尋ねた結果、次のようになる。

- ア. いう56名全員が「一文を短くする」を選択した。
- イ. 「はっきり話す」(94.6%)、「できるだけ二重表現を避ける」(91.1%)といった項目が、9割以上の学生から選ばれた。
- ウ. 「目の前にいる相手に対して主語を使う」(82.1%) や「漢字を書く際にルビをつける」(87.5%) も8割以上の学生が選んでいる。
- エ. 「ややゆっくり話す」(67.9%)、「文末表現を統一する」(78.6%)、「できるだけ漢字を避ける」(60.7%)、「できるだけ擬態語を避ける」(60.7%)などが6割以上の学生に選ばれた。
- オ. 「できるだけ方言を避ける」(51.8%)、「助詞を強調して話す」(44.6%)、「敬語の使用を少なくする」(48.2%)などは5割前後であった。

上記の結果から、普通の日本語から「やさしい日本語」を作成する際に、多くの学生は以下の5点を中心的な要点と考えていることが明らかとなった。

1. 一文を短くする
2. はっきり話す
3. できるだけ二重表現を避ける

4. 目の前にいる相手に対して主語を使う
5. 漢字を書く際にルビをつける

また、「やさしい日本語」を作成する際に参考となる資料についても調査対象者の意見を確認してみた。そこで明らかになったのは、

1. 5割以上のものは、「日本人小学生向けの絵本」(57.1%)、「初級日本語教科書」(57.1%)、「『やさしい日本語』に関する研究論文や書籍」(55.4%) の三つを参考資料として選んでいる。
2. 「小学校の国語教材」を参考資料にすると考えるものは約4割(39.3%)を占めている。
3. 「日本人小学生向けの漢字ドリル」を参考にすると考えるものは約2割(19.6%)を占めている。

調査アンケートの最終項目として、「やさしい日本語」に関する大学生の意見やコメントを自由記入形式で求めた。これに対し、合計5名の学生がコメントを寄せた。その結果を表3に示す。なお、回答はすべて原文のまま掲載している。

表3 「やさしい日本語」についての意見やコメントなど

1	「日本語母語話者が授業として学ぶ」必要性はないと思っている。なぜなら、日本語話者は「やさしい日本語」を学ばなくとも何となく使えると考えるからです。公共の場において「やさしい日本語」を使う、使い方を研究することは必要だと思います。公共の場では「伝わる」ことが何より重要だと考えられるからです。
2	「やさしい日本語」を見るとき、明瞭でわかりやすい文だなと感じました。しかし、変に区切られたり、元の文から大きく変化したものになってしまったら読みづらくなる可能性もあるのではないかと同時に思いました。
3	やさしい日本語を日常生活で使う機会は少ないと思う。しかし、やさしい日本語が必要な人が日本にいることも事実であるため、そのバランスを考えるのは難しいと感じる。
4	やさしい日本語は、日本語母語話者にとってもわかりやすいので、積極的に使えるようになるといいなと思います。
5	やさしい日本語に詳しくないのですが、言葉や漢字を伝わりやすい形に工夫した日本語だと捉えています。緊急時などは、日本語になれた人も混乱します。小学生などが大人と一緒にいる保障はないので、誰に対しても伝わりやすい伝え方の方法が整備され普及するのは良いことだと思います。

4.3 考察

今回の調査結果を考察すると、まず以下の4点が判明した。

- ①. 対象者間で「やさしい日本語」があまり知られていない、あるいは十分に普及していない現状が判明した。この結果は、文化庁（2019）の調査結果に示された20代以下の若年層における「やさしい日本語」に関する取り組みの認知度の低さと合致している。
- ②. 学校の授業を通じて「やさしい日本語」を知るようになった対象者が他のツールよりも多いことも明らかとなった。
- ③. 「やさしい日本語」を詳しく理解し、効果的に活用できている対象者は56名のうち約2名となり、明らかに少数である。
- ④. 調査対象者の多くが「やさしい日本語」に対して「興味があり」、かつ「学びたい」という意欲を持っていることが確認できた。

次に、大学教育において「やさしい日本語」に関する授業を導入することに関して、多くの調査対象者は肯定的な態度を示している。例えば、「周囲の外国人数が増加しているから」や「将来的に職場で『やさしい日本語』を使用する可能性があるから」といった理由が挙げられた。これらの理由を見ると、大学生は環境の変化に敏感であり、それに応じた対応策を考えていることがわかる。多くの大学生が「やさしい日本語」の役割について深く考えており、積極的に学習しようとする意欲があることが読み取れる。一方で、「あまり使用機会がないから」という理由で授業導入に否定的な意見を持つ対象者もいた。これに関しては、外国人との関わりには個人差があると考えられるものの、現在の社会状況を見ると、日本在住の外国人数が年々増加しており、将来的には外国人と接触する機会が増え、そして「やさしい日本語」を使用機会も増えると考える。

さらに、「やさしい日本語」の作成方法に関する調査対象者の意見を見ると、佐藤氏らによる「やさしい日本語」カテゴリーⅡの文作成ルールと一致していることがわかる。現時点で学生たちは「やさしい日本語」を作成する具体的なポイントをあまり把握していないものの、「やさしい日本語」の特徴や通常の日本語との差異をある程度認識していることが伺える。

また、「やさしい日本語」を作成する際の参考資料に関しては、調査対象者は「日本人小学生向けの絵本」、「初級日本語教科書」、「『やさしい日本語』に関する研究論文や書籍」が主要な参考資料になると考えていることがわかる。「『やさしい日本語』に関する研究論文や書籍」は、この分野の専門的な研究資料であり、作成時の参考資料として適切であると言える。しかし、「小学校の国語教材」が適切かどうかについては中石（2019:64）が指摘しているように、慎重な検討を要する。中石は、日本人幼児向けの絵

本や小学校低学年向け国語教科書を日本語能力が十分でない外国人向け資料として参考にすることは適切でないと指摘している。したがって、一部の学生は参考資料の選択において誤解していると言わざるを得ない。

最後に、自由記述に対して分析したところ、「やさしい日本語」は日本語母語話者にもわかりやすく、積極的に活用できるようになるべきという肯定的な意見が見受けられている。また、緊急時には日本語に慣れた人でも混乱する可能性があり、誰に対しても伝わりやすい方法が整備されることは望ましいという意見もある。一方で、日本語母語話者が授業を通して「やさしい日本語」を学ぶ必要性はないとする、否定的な意見も存在している。この否定的な意見に対して、野田（2014）は『「やさしい日本語」は、母語話者が非母語話者に日本語で話したり書いたりするために、母語話者が学ばなければならないものである。』（2014:5）と述べている。それ故、筆者は通常の日本語から使用者自ら「やさしい日本語」を作成することは簡単なことではなく、むしろ授業を通して学ばなければならぬと指摘したい。

本調査結果から、「やさしい日本語」はまだ普及していないものの、多くの対象者が興味を持ち、学習意欲があることが示唆されている。さらに、大学生は「やさしい日本語」の重要性を認識しており、大学における教育導入に対しても肯定的な姿勢を示している。以上の結果を踏まえて、大学教育において「やさしい日本語」に関する授業を導入することは、今後「やさしい日本語」の普及と多文化共生社会の構築に寄与する重要な役割を果たすと期待できると考える。

5 大学教育に「やさしい日本語」に関する授業を導入する可能性について

第4章の調査結果に基づき、筆者は「やさしい日本語」に関する授業を大学教育に導入する可能性があると考える。この章において、「やさしい日本語」に関する授業を大学教育に導入する意義、大学教育機関の改革と「やさしい日本語」および「やさしい日本語」を大学教育に導入する際の注意点という3点から「やさしい日本語」を大学教育に導入する可能性を論じてみる。

論じる前に、「やさしい日本語」の役割について再確認する必要がある。多文化共生社会の進展に伴い、「やさしい日本語」の役割も変化してきている。最初に、減災において、佐藤（2020）は「『やさしい日本語』の情報は外国人住民に限らず、日本人の高齢者から子供まで、また突然の災害で判断がつきにくくなっている住民の全てが理解するのに有効な表現である」（2020:47）と指摘している。その後、コミュニケーションにおいて、庵（2016）は「やさしい日本語」が日本語母語話者と外国人とのコミュニケーション手段として有効であるとの見解を示している。両者の見解に踏まえ、今後の多文

化共生社会において、日本語母語話者が多文化共生社会に適応するために、「やさしい日本語」を外国人とのコミュニケーション手段の一つとして活用することは有効であると言えよう。

5.1 大学教育に「やさしい日本語」に関する授業を導入する意義

大学教育に「やさしい日本語」に関する授業を導入することには、二つの意義があると筆者が考える。

第一に、日本人学生にとって母語である日本語を再認識する機会を提供する点にある。

山崎（2020）は、「やさしい日本語」を学ぶことが日本人学生にとって、母語である日本語について改めて考えるきっかけとなり、相手とのコミュニケーションの取り方に関して新たな気付きを得る契機になったと述べている。言い換えると、「やさしい日本語」の学習を通じて日本人学生は、自分自身が日常的に用いる日本語が外国人にとってどのように難解であるかを認識し、外国人との円滑なコミュニケーションを図るために日本語の調整方法について考える機会を得ることができる。また、庵（2021）によると、日本語母語話者にとって「やさしい日本語」を使うことが日本語母語話者の日本語能力を高める、「やさしい日本語」が「日本語表現の鏡」としてコミュニケーション力を高める役割を担う。つまり、外国人とのコミュニケーションにとどまらず、日本人同士のやり取りにおいても、自身の意図を相手に効果的に伝えるための方法を検討する契機となり、コミュニケーション能力の向上にも寄与することが期待できる。

第二に、「やさしい日本語」は将来の社会生活においても有用であるという点にある。中石（2019）は、「外国人とコミュニケーションを取る機会が増えるこれから先の日本では、普段使っている日本語だけでなく、それを外国人にとって分かりやすい日本語に置き換える能力は有用である。」（2019: 65）と指摘している。尾崎（2013）は、「仕事として外国人と接する日本人は少なくありません。そのような日本人が外国人と円滑なコミュニケーションができるよう「やさしい日本語」について学ぶ機会を提供する必要があります」（2013:72）と述べている。いずれにしよ、大学教育で「やさしい日本語」を学べば、将来的に職場などで「やさしい日本語」を用いて外国人とスムーズにコミュニケーションを行うことに間違えなく有益である。現在、株式会社メルカリやセブン・イレブン・ジャパンなどの企業では、「やさしい日本語」に関する取り組みや社員への研修が実施されている。これらの事例から、将来的に「やさしい日本語」がコミュニケーション能力の一つとして益々多くの企業から求められると考える。

また、中石（2019）は、「高等教育で「やさしい日本語」という概念を知り、それによるコミュニケーションを実践する機会を得ることは、英語やその他の外国語を用いる

ことができない状況であっても日本語を用いて日本語非母語話者とコミュニケーションする意識や能力を大学生に芽生えさせることになる」(2019: 65)と述べている。中石の考えのように、高等教育において、「やさしい日本語」という概念を学び、実践することで、日本語非母語話者とのコミュニケーション能力や意識を高めることができると言える。

5.2 大学教育機関の改革と「やさしい日本語」

大学教育機関における組織改革や新たな専攻の開設も、「やさしい日本語」を教育に導入する好機であると考えられる。近年、多文化共生社会の進展および外国人留学生の受け入れ拡大に伴い、組織改革や新領域の設立に着手する大学教育機関が増加している。たとえば、筆者が在籍していた大阪教育大学では、2017年に従来の学科を統合し、教育協働学科が新設された。同学科内に設けられたグローバル教育専攻・多文化リテラシーコースでは、多様な他者と豊かに共生できる素養を育み、言語とそれに不可分の関係にある文化を理解し、適切なコミュニケーション方法を学ぶことを目的としている⁴。また、近畿大学が2016年に国際学部を⁵、同志社大学がグローバル・コミュニケーション学部を開設する⁶など、社会環境の変化に合わせて動き出している高等教育機関が複数見られる。このように、現代の大学教育機関においては「多文化理解能力」や「コミュニケーション能力」の育成が重視される傾向にあることがわかる。過去の研究により、「やさしい日本語」が多文化理解と異文化コミュニケーションに有益であることが確認されているため、大学教育で「多文化理解能力」や「コミュニケーション能力」を育成するなら、大学で「やさしい日本語」に関する授業を行うこともあり得ると考える。

5.3 大学教育に「やさしい日本語」に関する授業を導入する際の注意点

木暮(2018)・中石(2019)・武田ほか(2020)などの先行研究の中から、大学教育に「やさしい日本語」に関する授業を行う実践例がいくつか見られるが、いずれも「やさしい日本語」の特性と限界に関する記述が見当たらない。「やさしい日本語」に関する授業を行うならば、「やさしい日本語」の特性および限界についてもまず学習者に説明する必要がある。

「やさしい日本語」の特性について、一般日本語のように独立して存在する言語では

⁴ 大阪教育大学ホームページ https://osakakyōiku.ac.jp/academic/education/edu_collabo/tabunka.html (2022年11月28日閲覧)

⁵ 近畿大学国際学部サイト <https://www.kindai.ac.jp/internationalstudies/about/undergraduate/efforts/> (2022年11月28日閲覧)

⁶ 志同社大学グローバル・コミュニケーション学部サイト <https://globalcommunications.doshisha.ac.jp/overview/index.html> (2022年11月28日閲覧)

なく、厳格なルールが存在しない点である。森（2013）は、「「やさしい日本語」は「こうでなければならない」という決まりがなく、「相手にわかりやすく伝えよう」という意識の表れであるといえます」（2013:240）と述べている。「やさしい日本語」は、話しが相手に配慮し、普段の日本語表現を語彙や文法の面で調整しつつ分かりやすく伝える手段である。この言語形式を使用する際には、特定の相手に合わせて語彙や文法を調整し、常に注意を払うことが求められる。

また、武田ほか（2020）によると、「やさしい日本語」は外国語の習得と異なり、新しい単語や文法を覚える必要がなく、要点を心に留めるだけで誰でも話せるようになり、すぐに使用に慣れて上達することができる。外国語の習得には新しい語彙や文法を一から学ぶ必要があり、時間と労力がかかるが、「やさしい日本語」の場合、日本人学生は新たな語彙や文法を学ぶ必要がなく、意識を変えるだけで作成可能になる。また、伝わっていないと感じた場合には、言葉の引き出しを次々に開けて忍耐強く言葉を探し続けば良いとされる。このように、外国語よりも「やさしい日本語」の方が、日本人学生にとっての学習負担が少ないと言える。それ故、日本人大学生に対しては、「やさしい日本語」の学習が容易であることを伝えることが望ましい。

「やさしい日本語」の限界について、報告書（2022:17）によれば、「やさしい日本語」は分かりやすさに重点を置いていたため、制度の詳細や複雑な話題を説明する手段としては適当ではない。筆者の認識の限り、「やさしい日本語」の限界として、使用対象や使用場面の制約が存在し、誰に対してもどのような状況でも適用可能なわけではない点が挙げられる。例えば、相手の日本語能力が高い場合、「やさしい日本語」よりも通常の日本語のほうが通じやすい可能性があり、そのような場合には通常の日本語を使用することが推奨される。報告書（2022）に挙げられた、制度の詳細や複雑な話題を説明するような場合、むしろ多言語対応や翻訳ツールの活用など他の手段を併用し、必要に応じて柔軟に切り替えるのが肝要であることはすでに実証されている。

6 おわりに

本研究は、教育協働学科の学生を対象に「やさしい日本語」に関する意識調査を実施し、その普及状況と大学教育への導入の必要性に関して考察を行ったものである。

調査結果から、教育協働学科の学生における「やさしい日本語」の認知度は依然として低いことが判明した。しかしながら、その役割と有効性については多くの回答者が認識しており、「やさしい日本語」の学習に対する意欲も高いことが示唆された。さらに、大学教育における「やさしい日本語」関連授業の導入に関しては、大半数の回答者が肯定的な反応を示した。最後に、調査結果を踏まえ、筆者は大学教育における「やさしい

日本語」の授業導入に関して、導入に際しての注意点、意義、及び大学教育機関の改革の観点から考察を行い、大学における「やさしい日本語」の授業導入の必要性を主張してみた。

これらの結果を踏まえ、本研究は、今後の大学教育において「やさしい日本語」に関する授業を導入する必要性を提唱する。若年層への「やさしい日本語」の普及は、多様な背景を持つ人々との共生社会を実現する上で重要な課題であり、大学教育はその達成に向けた重要な役割を果たすことができると考えられる。

本調査の対象が教育協働学科の在学生に限定されているため、調査結果から得られる知見の適応範囲は限定的なものとなる。今後、より包括的で多様な視点を反映した調査結果を得るためにには、異なる大学や専門分野の大学生を対象とした調査が必要である。また、大学教育に「やさしい日本語」を含む授業を導入するためには、「やさしい日本語」に関する具体的な授業カリキュラムの作成が今後の重要な課題となる。

参考文献

秋元美晴・池上摩希子・加納千恵子・斎藤ひろみ・西口光一・松尾慎（2014）『特集「『やさしい日本語』の諸相」について』日本語教育 158、pp.1-3。

出入国在留管理庁・文化庁（2020）『在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン』
出入国在留管理庁。<https://www.moj.go.jp/isa/content/930006072.pdf>（2022年10月11日閲覧）

出入国在留管理庁（2022）『全体版 報告書 やさしい日本語の普及による情報提供等の促進の在り方』出入国在留管理庁。<https://www.moj.go.jp/isa/content/001370227.pdf>（2022年8月3日閲覧）

岩田一成（2013）「やさしい日本語」の歴史 廉功雄・イヨンスク・森篤嗣（編）『多文化共生社会を実現するために「やさしい日本語」は何を目指すか』, pp.15-30. ココ出版

木暮律子（2018）「「やさしい日本語」の指導に向けた考察—日本人学生を対象とした調査をもとに—」『地域政策研究』21(2)、pp.15-33。

佐藤和之（2020）グローバル化を考える「」の付いた「やさしい日本語」の目的と使い方：外国人も日本人も理解する外国語であるということ 国際文化研修, 28(1), 46-49。

廉功雄（2016）『やさしい日本語—多文化共生社会へ』岩波新書

廉功雄（2019）「マインドとしての〈やさしい日本語〉理念の実現に必要なもの」廉功雄・岩田一成・佐藤琢三・柳田直美（編）『〈やさしい日本語〉と多文化共生』, pp.1-21. ココ出版

庵功雄 (2021) 「日本語表現にとって「やさしい日本語」が持つ意味」『一橋日本語教育研究』9、pp.121-134。

弘前大学社会言語学研究室 (2017) 『生活情報作成のための「やさしい日本語」ガイドライン』弘前大学人文学部社会言語研究室。

弘前大学人文学部社会言語研究室 (2013) 『増補版「やさしい日本語」作成のためのガイドライン 第2版』弘前大学人文学部社会言語学研究室
https://www.fdma.go.jp/singi_kento/kento/items/kento207_20_sankou5-6.pdf
(2022年8月5日)

林伸一 (2015) 「「やさしい日本語」とは何か?:外国人にわかりやすい表現について」『異文化研究』9、pp.14-30。

宮原暁・栗原由佳 (2011) 「やさしい日本語」からみる多文化共生 GLOCOL ブックレット, 6,43-78。

森篤嗣 (2013) 「「やさしい日本語」と国語教育」庵功雄・イヨンスク・森篤嗣 (編) 『多文化共生社会を実現するために「やさしい日本語」は何を目指すか』ココ出版、pp.239-257。

水野映子 (2022) 「ライフデザインの視点」『「やさしい日本語」の重要性～多文化共生社会をめざして～』第一生命経済研レポート。

野田尚史 (2014) 「「やさしい日本語」から「ユニバーサルな日本語コミュニケーションへ」—母語話者が日本語を使うときの問題として—」『日本語教育』158、pp.1-18。

中石ゆうこ (2019) 『高等教育における「やさしい日本語」実践の可能性』県立広島大学総合教育センター紀要 4、pp.55-67。

武田裕子・石川ひろの・新居みどり・岩田一成 (2020) 「外国人診療に役立つ「やさしい日本語」: 医療における協働を可能にするコミュニケーション」『医学教育』51 (6)、pp.655-662。

山崎恵 (2020) 「「やさしい日本語」再考」『姫路獨協大学国際言語文化論集』1、pp.61-73。

謝辞

本論文の作成にあたり、指導教員の王周明教授と大谷晋也准教授より丁寧なご指導を頂きました。さらに、査読者の先生方からも有益なご指導、ご助言を頂きましたこと、この場を借りて心よりお礼を申し上げます。なお、本稿の不備や誤りは筆者に帰するものです。

